



「姉別の初夏」

詩人小説家アイヌ文化の研究などに精力的に活躍された更科源藏さん（九〇四〜一九八五）の著、アイヌ語地名解（昭和五十七年刊みやま書房）によれば根室本線「姉別」の謂れは、アイヌ語の「細い川」が語源で駅より北西へ約四軒ほどの地点に湿地の水を集め、風蓮川へ合流する小川がそもそもの始まりといわれています。

五月中旬、浜中駅停車場の端から牧草畑の中の道路を「姉別」へ直走する。

「姉別」の町はずれ、牧場の取付道路に車を止め、手をかざすと、眩しい丘を隔てて広大な天地の果てに一瞬、風蓮湖の水面が輝いた。

豊かな大地はうねり、農家や牧場を囲む生き生きとした緑蔭の林がすがすがしい。

明るい灰色の雁皮の幹、山裾のハンノキ群、エゾマツ、トドマツの混交林や、ラクヨウも元気に枝をいっぱい伸ばし、「姉別」の初夏を謳歌している。

（ペン&スケッチ 小椋 昭三）

## ひとのうごき

4月末現在（前月比）

- 人 口：6,663人 (+39)
- 男：3,235人 (+22)
- 女：3,428人 (+17)
- 世帯数：2,471世帯 (+36)



## おたんじょう

- 新 川・木村 樹紀くん（卓市さん）
- 茶内沢会・阪野 小春ちゃん（真人さん）



## おくやみ

- 火散布・柳田 益博さん（82歳）
- 茶内旭・片島 チイさん（83歳）
- 茶内共栄・大谷 幸一さん（84歳）
- 丸山散布・原田 良雄さん（72歳）
- 新 川・船柳 幸子さん（67歳）
- 茶内西・谷本 信男さん（80歳）

### ～訂正とお詫び～

5月号裏表紙、はまなか行事カレンダー中、浜中町自治会連合会総会の日程を23日(日)と、25日(火)に2箇所標記してしまいました。正しくは25日(火)の日程でした。ここに訂正し、お詫び申し上げます。



## 俳句

ふるさとの詩友師臉に啄木忌

湿原にさ迷う霧の季節かな

新婚のカップル来たり花の風

五月入り異常気象か寒い日も

手の届くところに酒あり虎空笛

福沢 睡蓮（茶内）

小椋 昭三（暮帰別）

酒井 梅子（茶内）

鈴木 徹夫（霧多布）

吉本 弘（霧多布）

## 短歌

旅立ちの朝は樹氷のさんざめくそんな日が良し待つ外はなし

むらさきの種落さむとして春急ぐ楓もみらは早芽ぶきをり

母さんまだ来ないから行くなど立ち止まり振り返り見る

はらからの老いて皆病み雪解けの川の瀬光るもふつつ淋し

静まれる遠き山よりドラミングの春を告ぐるか空よりひびく

松永 真澄（茶内）

二瓶 良子（茶内第三）

福沢 睡蓮（茶内）

相原 睦子（茶内）

松館スミ子（貫人）

## 詩

北の梅雨

霧雨のけがる朝間の

土手の野草や緑のなかに

タンポポの咲き乱れる

穏やかな坂を登りきて

休日の散策も車では味気のない

六月の空模様である

天候が一向に回復しないのは

今や全国的に梅雨どきの最中で

道東でもこの影響を受けている

何時になつたなら快晴の空が

見られるのだろうか

この様に霧雨の続く毎日では

健康上に最も良くないと思う

この時期になると何処か棲みよい国が

ないものかと思いつつゆく当てもなく

この地にへばりついて

道東特有の風土をつくづく

考へさせられる昨今だが

霧雨のけがる毎日でもある

徳光 千秋（琵琶瀬）